

『宇津保物語』における〈老女の恋〉

—— 一条北の方をめぐる ——

柳 瀨 先

はじめに

『宇津保物語』における翁・姫の造型は、二つに大別できる。一つは、〈琴の物語〉における神聖性を帯びながら俊蔭一族を守ったり、予言や過去の出来事を語る役割であり、もう一つは、〈あて宮求婚譚〉における滑稽な狂気ともいえる姿である。⁽¹⁾そして、後者の系譜にありながらも、「忠こそ」巻では、故忠経の一条北の方が〈好色な姫〉として登場し、その老女の恋の失敗は、独特の継子いじめ譚を形成していく。

一般的に〈色好み〉は男主人公の資質として考えられていることが多い。⁽²⁾しかし、老女の好色に対しては、『枕草子』が「にげなきもの」として、「老いたる女の、腹高くてありく。若き男持ちたるだに見苦しきに、こと人のもとへ行きたるると腹立つよ」(一〇一)という。また、『二中歴』の「十列」にも、「冷物 老女の仮借酔ひ

女」「不用物 老女の好色」とあるように、老女に対する態度は冷たいが、老いた男の好色については、記されていない。服藤早苗氏は、このような老女に対する厳しい視線を「高齢女性の性愛を非難した言説」であり、「ジェンダーが権力構造として進行していく」⁽³⁾と指摘している。物語における〈好色な姫〉の類型に関しては、『伊勢物語』のつくも髪段がその典型とされ、その系統として『源氏物語』の源典侍物語が指摘されてきたが、『宇津保物語』の「忠こそ」巻における一条北の方(忠経の末亡人)の位置づけについては、あまり論じられていない。

本考察では、それぞれの〈好色な姫〉の物語の表現構造に内在する、物語の方法の差異や類似を確かめながら、「忠こそ」巻における〈老女の恋〉の位相を追求し、その一連の挿話をもたらす『宇津保物語』の長編化過程を分析していきたい。

一 〈恥〉の意識による「情け」ある男と姫の契り

平安朝の〈色好み〉の男女関係を、今関敏子氏は「〈行動し、働きかける男〉と〈待つ身を選び、拒む女〉という図式」¹⁾として説明している。しかし、『宇津保物語』の一条北の方の恋の物語には、この図式とは相反する〈行動する女〉と〈拒む男〉という関係が成り立っている。つまり、一条北の方の〈好色な姫〉としての造型は、〈行動する女〉として捉えられる。

老女の恋の物語における姫の年齢の記述は、〈行動する女〉の好色性を強調している。『伊勢物語』のつくも髪つくもかみの姫は、誇張とはいえ「百年に一年たらぬ」九十九歳であり、『宇津保物語』の一条北の方は「男はただ今三十余、女は五十余ばかりなり、よきほどなる親子ばかりなる中」(忠こそ、一一三)と設定されている。この千蔭と一条北の方の年齢の対比は、『源氏物語』の「年いたう老いたる(源)典侍」の年齢が「五十七八」であり、「二十の若人たち」を相手にすると共通している。²⁾

ところで、〈好色な姫〉の物語における老女の恋愛相手の典型は、業平や光源氏のような男であり、その契りは老女の側が若い男主人公に執心して、男の方は同情心

や風流心から老女と関係を持つというものである。しかし、一条北の方と契りをもつ千蔭は、忠こそその母の「腹汚き人につきて、悪しき目見せ給ふな」(忠こそ、一二二)という遺言どおり、権門からの数多くの縁談を断り続けて「女といふもの、目に近く見給はず」(忠こそ、一二二)というように、〈まめ〉な男として登場していた。そのような千蔭と一条北の方との契りは、色好みの男を相手にするつくも髪や源典侍とは異なる、独特な〈好色な姫〉の物語を展開していく。

一条北の方は、千蔭への懸念にあたって、「恥を捨て、言ひ出でむ」(忠こそ、一一三)という積極的な態度をとる。さらに、反応のない千蔭の心を変えたのは、一条北の方の「恥見せ給ふな」という言葉であり、次のような、千蔭の恥の意識であった。

女(一条北の方)は、をかしきこともあはれなることも聞こえ給ひつつ、「恥見せ給ふな」と聞こえ給へば、「千蔭」やむごとなき人の、切にのたまふを、聞き過ぐしてやみなば、情けなきやうにもあり、人の御恥にもあり。さりとて、昔を忘ればこそあらめ。時々、通ひてまうでむかし」と思ひて、まうで通ひ給ふに

(忠こそ、一一三)

このように、千蔭が一条北の方の求婚に屈し、忠こそ

の母の遺言を破棄して、彼女のもとに通い始めたのは「情けなき」男と思われるのを嫌がり、また、一条北の方に〈恥〉をかかせることが、ある意味で、男としての〈恥〉だと意識していたからである。

『伊勢物語』のつくも髪の姫が、自分が姫であることを承知したうえで、理想の相手として望んだのも「心なさけあらむ男」(二六四)であった。その男が〈好色な姫〉への同情心から契りを結んだことに対する評、「世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、この人は思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ心なむありける」(二六六)には、「情け」を男の美質として捉えていることがよく示されている。

また、一条北の方のような老女の〈恥〉の機能は、『源氏物語』の源典侍が振り切って出かける光源氏に「今さらなる身の恥になむ」(①紅葉賀、三三八)と追いつがり、引き止めようとする手段にもなっている。もちろん、光源氏は、千蔭のように〈恥〉の意識によって姫と関係を持つわけではない。光源氏には、頭中将とともに、源典侍の「いみじうあだめいたる心さま」(①紅葉賀、三三六)に対する好奇心が作用している。千蔭の「情け」ある男になりたいという意識には、どんな女にも関心をもつ光源氏や頭中将の「いたらぬ隈なき心」(①紅葉賀、

三三九)と同質ではないが、男の色好みな性格が潜んでいる。光源氏や頭中将と同じく「色好み」とは規定されないものの、やはり千蔭にも「情け」ある男が「よき男」だという意識はあり、それに関わる〈恥〉の意識が千蔭をからめとっていくのである。

しかし、千蔭の「情け」ある男としての行動は、実際には、色好みではない男が、世間を意識し、同情心をもって、一条北の方と契りを結んだというだけにすぎない。そして、こうした千蔭による忠こそ母の遺言の破棄や、継母の計略による家の崩壊の過程には、この物語が冷ややかな目で、「色好み」をとらえていることがわかる。

ところで、このような、一条北の方と千蔭との関係において繰り返される〈恥〉の機能について、大井田晴彦氏は、「執拗な北の方の性質を表現するにとどまらず、呪文のような響きが感じられる」と、千蔭を引き寄せる巫女的な力として論じている。老女の若い男との契りにおける、古代的な信仰をもとにした巫女的な呪力性については、いくつかの例がある。『源氏物語』の源典侍の場合は、温明殿という場所や、源典侍の歌の性質との関わりから、巫女性が論じられたり、『伊勢物語』のつくも髪の姫についても、「付喪神」のような変化のものとしての老女の本質が指摘されたりしている。確かに、古

代的・神話的な発想の側面からみると、一条北の方の〈恥〉は不思議な力を持っているといえる。

しかし、この物語では、老女の巫女的な性格より、現実的な側面から老女が財を尽くしてまで恋をなしとげようとする、滑稽な〈行動する女〉としての一条北の方の姿が強調されていることに注目すべきであろう。

二 〈行動する〉女の滑稽化

〈好色な老女〉の恋の物語には、老女の容貌や好色な行動から生じる滑稽譚が常に伴う。その系譜からみると、一条北の方には、つくも髪の「世心つける女」や源典侍の「いみじうあだめいたる心」のような、嫗の好色的な氣質を規定する記述はない。しかし、一条北の方の姿には、男に求愛するため、「財を尽くして労り給ふこと限りなし」(忠こそ、一一四)という情熱と、父子を同時に恋愛の相手として求めるといふ大胆さが、〈行動する女〉としての好色な嫗の特質を見せている。そして、そこには〈拒む男〉に対する〈行動する女〉の滑稽が描かれている。

一条北の方の人物造型は、まず「心にもあらぬ人の、歳老い、かたち醜きを見給へば」(忠こそ、一一四)と、人格も姿も否定的に描写されている。また、音楽の才に

おいても彼女の技量は「『興あり』と思されむ」とて、箏の琴・琵琶など取り出でて、よろづの声に調べて弾き給ふ。聞き愛で給へど、逃げなまほしく、かしがましく思はず」(忠こそ、一一四)と、滑稽に描かれている。それは、源典侍が「ことにまさる人なき上手」(①紅葉賀、三三九)であり、「琵琶をいとかしう」弾いた音が光源氏の心をひきつける機能とは正反対に、男が逃げたいと思うまでのものであった。さらに、一条北の方の物語の滑稽性は「並びなき、世の財の王」(忠こそ、一一二)として登場した彼女が、好色によって「貧しくなりぬ」と没落していくところに顕著である。

一条北の方は「殊なる思ひもなき人の、よくせずは、絶えもしぬべければ」(忠こそ、一一四)と千蔭を引き留めるために、経済的な援助をする。一条北の方が、財を尽くして「千蔭ノ頭より足末までに、綾・錦を裁ち切りて、見給はむ草木まで着せ飾」り、千蔭の従者や「草刈・牛飼まで飽き満たせてあらせむ」(忠こそ、一一四)という行動は異常ともいえる。しかし、千蔭の態度は「露塵物取らせむの心なし」(忠こそ、一一五)と、冷淡であった。そのような千蔭の態度にも関わらず、さらに、一条北の方が「田・畑売り尽くして、数知らず使ひ給へば、限りなき財といへど、貧しくなりぬ」(忠こそ、一一

五)と、千蔭への恋情に狂う姿に、滑稽さが強調されている。

また、一条北の方の姿には、千蔭の関心を惹きつけるために繰り返して「仏神に大願をたて」という行動が目立つ。しかし、「山々寺々に修法行ひ、仏神に大願を立て給へど、しるしなし」(忠こそ、一一二)と、彼女の呪力が無効であることが語られ、語り手の冷やかかなまなざしが認められる。もちろん、千蔭が「ここ(一条)にもし給ふことは苦しけれど」(忠こそ、一一四)と嫌悪を感じながらも、「(一条北の方)山々に修法行ふ力になむ、年月の経るままに、心ざしは劣れど、なほ絶え給はざりける」(忠こそ、一一四)という表現には、彼女との縁を切れないことに「山々に修法行ふ力」が作用しているかのように語られてはいる。

しかし、一条北の方を通して来なくなった千蔭を思い焦がれて「陰陽師・巫を召し集めて」(忠こそ、一三〇)行う積極的な行動は、あて宮求婚譚において、上野の宮があて宮を獲得するため、「陰陽師・巫かんなき・博打・京童部・嬭・翁」(藤原の君、八〇)を集めて計略をする場面と類似している。このような、一条北の方や上野の宮の行為は、恋のやりとりにおいて、自分の力ではどうしようもないとき、ありとあらゆる力に頼る経済力があること

表出にすぎない。

このように、一条北の方が経済力に頼って、呪力まで使ったにも関わらず、彼女のところへ通うのが「病の重る心地」であった千蔭は、縁を切る言いわけを考える。これに気付いた一条北の方は、千蔭を「出だしやらじ」と思い、「よろづに言ひとどめ、御前なる人も、夢語りなど」をしなから、引き留める。しかし、それも二、三日しかもたず、再び、千蔭が出かけようとしたとき、彼女が持ち出したのは、「物忌みし給ふべき夢を見つ」(忠こそ、一一七)という手段であった。この男を引き留める方法には、つくも髪の方が「心あらむ男」と逢うために、息子たちに「まことならぬ夢がたり」(一六五)をするという素材のパロディ化が見られる。

男の視点を重視するつくも髪や源典侍の〈好色な老女〉の物語とは異なり、女の行動に焦点をあわせた傾向が強い一条北の方の恋の物語では、嬭の求愛が男から拒否され、嬭の恨みによって男が災いをうけるという物語へと展開していく。その災いが継子いじめであり、そこには、忠こそ母の遺言の破棄と関わる千蔭の「情け」の問題が作用している。

三 継子いじめ譚への転移

若い男と老女との恋は続かない。〈拒む男〉である千蔭と継子の忠こそに対する一条北の方の恨みは、父子を離ればなれにさせ、〈家〉が崩壊するところまで、物語を進展させていく。すなわち、「忠こそ」巻における〈老女の恋〉の物語は、物語の内なる物語として継子いじめ譚^⑩を包摂し、さらに〈家〉の問題を取り込んでいく。そして、〈行動する女〉としての一条北の方の姿は、求愛する老女の滑稽な姿から、恨みを持つ女、そして、継子をいじめ、継母のそれへと変貌していく。

一条北の方の継子いじめの物語は、「忠こそ」巻のはじまりの部分で「腹汚き人につきて悪しき目見せ給ふな。腹汚き人ありて、悪しきこと聞こゆる人ありとも、言はむ人の罪になし給へ」(忠こそ、一一二)と、忠こそ母の千蔭への遺言の中で予告されており、この遺言の放棄には〈家〉の崩壊という悲劇の結末も準備されていたのである。

さらに、この話題は、すでに「俊蔭」巻でも、仲忠母子を北山のうつつほから三条の邸に迎え入れようとする兼雅が俊蔭女を説得する場面において、「親なき人は、身もいたづらになるものなり。『昔、千蔭のおとどの、た

だ一人子を、継母に謀られて、今は、音にも聞こえず』(俊蔭、五二)と、後見人としての母親不在による害悪の実例として取り上げられている。

このように、マイナスイメージの継母として登場する一条北の方の好色は、忠こそ父子を同時に恋することにあらわれる。巻頭で「玉光り輝きたる男」として紹介された忠こそは、父を尋ねて、一条殿へ足を運ぶようになったころ、再び次のように紹介される。

忠こそ、十三、四になりぬ。かたち清らに、心のなまめきたること限りなし。よきほどなる童にて、遊びとかしこく、こともなき色好みにて生ひ出でて、女御たちをも見馴らして、帝、限りなく時めかし給ふ。(忠こそ、一一五)

魅力的な男として成長した忠こそに目を向けた一条北の方は、「千蔭ノ御代はりになむ頼み聞こゆる」(忠こそ、一一五〜一一六)と忠こそへ懸想を仕掛け、「御後見は、いとよく仕まつらむ」(忠こそ、一一六)と経済的な援助を約束する。しかし、忠こそへの反応はない。

一条北の方の「継母」という呼称は、「久しく、おとど、一条殿へまうでたまはず。忠こそ、あこ君のもとへ時々通ふを、継母の北の方、「うらやまし」と思しけれど、いと片思ひなり」(忠こそ、一一七〜一一八)という

記述が初出である。この忠こそその恋愛相手であるあこ君を羨ましがらる場面は、恋の相手が千蔭から忠こそへと変化したことを表すとともに、継母の「片思ひ」を拒んで虐待されるという、継子いじめ譚の始まりを告げている。

千蔭を「思ひ焦られて、湯水も参らず」(忠こそ、一一六)待ちつづけ、五月五日の節供の準備もしていた一条北の方は、訪れない千蔭への狂おしい恋の代わりに、忠こそに「片思ひ」の「気色ある消息」を贈る。しかし、忠こそその冷やかな態度や、特に「年波」を「老いの波」と誤解した忠こそその「寄る波のすぎわたれば菖蒲草なほ思ふこそ苦しかりけれ」(忠こそ、一一八)という返歌は、一条北の方から恨まれる契機となってしまう。ここでの、忠こそを恨んだ一条北の方の発言、「我に恥見すること。いかでか、これが報いせむ」(忠こそ、一一八)にも、千蔭と契りを結ぶ時と同じ〈恥〉の意識がうかがわれる。そして、一条北の方は、父子の中を裂くよう画策する。その一つは、代々伝わる石帯を忠こそが売り払ったかに見せかけることであり、もう一つは「こともなき色好み」の性格を利用した讒言である。

一条北の方が忠こそ父子を離れさせる計略として、なぜ石帯を用いたのかということと考えると、そこにも、老女の好色性を読むことができるかも知れない。源典侍

が頭中将の帯を拾ったり、一条北の方が千蔭の石帯を盗んだりする行為に、性を象徴する〈帯〉が嫗の好色性を強調する共通の素材になっているという説もある¹²⁾。小島菜温子氏は、一条北の方と石帯の関連性について、「一条殿北の方は、源典侍の前身のひとりとされる、好色な老女だ。彼女は「帯」を小道具として、皇権への〈犯し〉を捏造する。その仮構された〈犯し〉を、源典侍挿話は、パロディとして描きなおすのではないか¹³⁾と指摘している。

しかし、それは『源氏物語』の源典侍挿話における「帯」の〈性〉的なニュアンスを、〈好色な老女〉の物語ではめた解釈であり、そこでは、「石帯」という素材の異質性が見逃されている。この物語における「石帯」は、〈性〉の象徴としての「帯」とは異なり、長編物語の構成における一つの素材になっている¹⁴⁾。

「忠こそ」巻の「石帯」は、継子いじめの計略や親不孝の象徴として用いられており、その喪失は〈家〉の崩壊の契機になっている。そして、「石帯」はそのような挿話的な象徴性にとどまらず、「累代に伝はれる帯」としての〈家〉の相伝の問題や、「この帯奉らば、位をも譲らむかし」(忠こそ、一一九)という「皇権を相対化す

る」¹⁵ 象徴性を通して、物語の長編構造における俊蔭一族の琴の主題との関係を結んでいく。さらに、石帯の由来が「貞信公の」(蔵開・中、五五五) 石帯であったことから、政治的な權威の象徴としての性格が付与され、やがて「さることありける帯は、仲忠のもとに」(国讓・中、七二) 入るといふ経緯は、俊蔭一族とつながる物語の長編化の意図を示している。こうした構成は、この物語の各々の〈家〉の物語が、物語の後半に至っては俊蔭一族に吸収され、琴の一族の優位性を浮き彫りにする構造として理解できる。

つまり、物語の後半まで、繰り返して語られている「石帯」の「多くのことありし」(蔵開・中、五五五) 物語は、一条北の方が計略として石帯を用いたという短編的・挿話的な視点ではなく、この物語の全体的な構成において、なぜ「忠こそ」巻の継子いじめ譚において「石帯」が素材になっているのかと問う必要がある。「石帯」は、老女の〈性〉の象徴性を基にした計略というよりも、物語の長編化の意図として用いられた素材であり、一条北の方の「皇権への〈犯し〉の捏造」は、彼女の〈性〉の言説より、むしろ忠こそその〈性〉をめぐる言説を通して生成されているといえよう。

四 忠こそその〈性〉をめぐる継母の計略

忠こそは父の千蔭とは異なって、「こともなき色好み」(忠こそ、一一五) と造型されながらも、一条北の方の愛欲に対して何の反応もしない。なぜ、この物語は〈好色な嬪〉との性的な関係を〈まめ〉なる男として語られてきた千蔭に持たせる一方で、忠こそには持たせなかったのか。それは、『宇津保物語』の特徴といえる「色好み」と「まめ」との価値観の対立と分裂とをかかえこ¹⁶ んだ構造から読み取ることができる。つまり、一条北の方と千蔭の契りには、〈好色な老女〉と〈色好みの男〉との契りという〈老女の恋〉の典型とのズレが設定されており、忠こそが「色好み」として造型されたことにも、主人公の美質とは異なる、この物語の意識的な装置が用意されている。

忠こそ「こともなき色好み」という表現について、中野幸一氏(『新編日本古典全集』小学館) は「恋愛の方面ではなく、風流人、の意」として捉えている。しかし、そこには一義的な解釈でおさまりきらない問題が潜んでおり、それはやはり恋愛に関わる用語と理解すべきである。

『宇津保物語』の「色好み」という表現は九例(一例

のみ女)あり、その特徴は、最上級の色好みという修飾語が目立つことである。「世の中の色ごのみ」(嵯峨の院、一九〇)と名付けられた仲頼や「類なき色好み」(蔵開・下、五八二)である近澄(仲澄ノ弟)には、色好みの美質の条件の中で、音楽の才や容貌が強調されている。しかし、その人物たちよりもっと優れた音楽の才があるにも関わらず、俊蔭や仲忠、そして涼が、「色好み」と名付けられなかったことは、この物語における「色好み」の内実が、次のような、男と女の恋愛関係にあったためであろう。

a (兼雅) 限りなき色好みにて、広き家に多き屋ども建てて、よき人々の娘、方々に住ませて」

(藤原の君、七二)

b (平中納言) いとかしこき遊び人、色好みにて、ありとしある女をば、皇子たちをも、御息所をも、のたまひ触れぬなく、名高き色好みにものし給ひけり。」

(藤原の君、七二)

「俊蔭」巻で、「いみじき色好み」として登場した兼雅が俊蔭女を妻としたことに対して、世間は「色好みの果て」と評しており、また、あて宮の求婚者の一人として、兼雅が「限りなき色好み」(引用文a)として噂されたのは、「名高き色好み」(引用文b)の平中納言と同じ

ような女との恋愛関係にある。特に、兼雅の過去についての「宮をば盗みもて来て、さる者にて据ゑ奉りて、人の妻などのもとにも、至らぬ隈なき歩きて、皆憎まれでこそありしか」(蔵開・中、五六九)という記述には、反倫理的な側面がうかがえる。その兼雅が(まめ)な氣質に変化した「春日詣」巻で、忠雅が帝に語る「ただ今、かれ一人(俊蔭女)をなむ侍て侍るなる。本妻ども皆忘れ侍りて」のような兼雅の態度について、帝の次のような評には、この物語における「色好み」と「まめ」との価値観の対立と分裂」を読み取ることができる。

「いと興あることかな。まだ『かの大将の、妻一人持たる』と聞こえず。三の宮を思ひし時も、十七、八人ばかり持てありしを、いかなれば、ただ一人にはなりたらむ。その皇女を忘るばかりの心憎さよ。」

(春日詣、二五四)

要するに、忠こそ「こともなき色好み」は、兼雅や平中納言のような恋愛の方面を抜きにしては成り立たない氣質である。そして、この氣質を(好色な)の物語の展開において老女とも契りを結ぶ、業平のような「けぢめ見せぬ心」や、光源氏と頭中将の「いたらぬ隈なき心」と比較すると、忠こそその造型では、次のような継母のいじめに口実を与えたことが強く浮かびあがる。

「忠こそ、いかなることかありけむ、あさましき心つきて、夜昼言へば、見知らぬやうにて侍れば、思ひ狂ひて、『おほかたは、父おとどのいますぐればぞ、かく悔り給ふ。いますからずは、何か慎まむ。この道には、親子なきものななり。このおとど、^①帝傾け奉らむ』と奏して、流させ奉りて、慎むことなくて責め言はむ』となむ言ひたばかるなる。」

(忠こそ、一二二)

ここで、一条北の方は、祐宗(故忠経の甥)に「昔より、腹汚きものに、人の言へば、あぢきなくてなむ、えものせぬ」(忠こそ、一二二)と、継母としての否定的な立場を語りながら、継子である忠こそに犯されそうになつたと訴えている。そこには、継子譚をパロディにしている一条北の姿、すなわち、『源氏物語』蜩巻の「継母の腹汚きむかし物語もおほかるを」や、『落窪物語』の「継母の憎むは例のことに人も語る類ありて聞く」(『新全集』、一〇七)という記述に示されるような、継母の類型を踏まえた上で、それとは逆の忠こそとの関係、つまり、継子が継母に困難をもたらす関係を語っている(傍線部ア)。特に、一条北の方によって捏造された、忠こそその「この道(恋)には親子なきものななり」という発言は、彼女が千蔭父子を離れさせる計略の手段として

用いている。そして、一条北の方の捏造は、もともと忠こそが継母の懸想を婉曲に断るため、「かしこきこと(父トノ関係)のなからましかば、うれしからまし」(忠こそ、一一八)といった言い訳を逆手に取つた空言である。また、傍線部(イ)の一条北の方の空言では、好色に分別を失つた忠こそが帝に、父の千蔭が「帝傾け奉らむ」としているを奏上して、父を左遷させ、自分を手にいれようとしていると訴えている。そこには、忠こそその好色による、千蔭の皇権への(犯し)が捏造されている。つまり、「こともなき色好み」として造型された忠こそその姿は、継母による、男の継子への虐待が性的要素を色濃く持つという継子いじめ譚を形成する一つの要因になっている。

さらに、忠こそその好色な気質は、祐宗によって、より強調されている。祐宗が一条北の方に語る忠こそと梅壺との関係は、帝の妻と密通し皇権を脅かすことを意味し、そこにも忠こそその(性)による皇権への(犯し)の構図が設定されている。

「祐宗」梅壺の御息所、え隠し給はざめり。これを見給ふればこそ、いと恐ろしけれ。この御息所は、ただ今の時の人なり。気色を御覧じて、なほ候はせ給ふになむ、恐ろしき」北の方、これを聞き給ふに

「人にも、かく思されけり」と思ふに、ねたきこと限りなし。(忠こそ、一二二～一二三)

忠こそその出家後、兼雅の妻妾となる梅壺の御息所に関しては、「蔵開」巻の、兼雅が仲忠と俊蔭女に一条殿の女たちのことを語る場面で、「梅壺の御息所といひて、いみじかりし色好みなりし」(蔵開・中、五六七)という。「こともなき色好み」の忠こそと、この物語では一例のみ、女の色好みと名付けられた梅壺との密通という発想からみても、語り手の評言通りに忠こそを欠点がない風流人として位置づけるのには無理がある。もちろん、忠こそが梅壺とほんとうに密通をしたのか、祐宗の讒言なのかは分からないが、それは重要な問題ではない。注目すべきことは、一条北の方と祐宗を通して語られた忠こそその〈性〉をめぐる言説が、忠こそを「こともなき色好み」として設定したこの物語の方法である。忠こそ「こともなき色好み」の造型は、ただ、理想的な男性の美質を表すだけではなく継子いじめの讒言の契機に用いられた、この物語の仕掛けと考えられる。また、出家した忠こそが、「春日詣」巻で、仏道者という特異な立場であて宮への懸想人の一人として登場することも、「こともなき色好み」としての造型を証し立てているだろう。

高橋亨氏は、この物語で色好みとされるのは、「高貴

な家の娘たちや皇女、御息所まで求婚して、多くの恋や結婚に情熱を傾け、『遊び人』として、音楽や芸能に秀でた美男子たち」であり、それらの男たちの「色好み」は贊美され、「少なくとも、それじたいに否定的な意味はこめられていない」と指摘している。その通り表面的には、この物語の男の「色好み」をネガティブな形で示しているものはない。しかし、そこには内部構造における読みとのズレが生ずる。つまり、表現構造において男の美質として名付けられた忠こそ「こともなき色好み」は、継母の計略を通して虚構化され、儒教の思想を基にした価値判断によって、「好色」以外の何ものでもありえないという、ネガティブなイメージへと逆転されている。要するに、この物語の「色好み」がもつアイロニーを露呈しているのである。

こうした忠こそその〈性〉をめぐる讒言と「石帯」を用いた継母の計略とによる千蔭家の崩壊は、忠こそその出家とともに彼の愛用の琴が天に巻き上がることを通して、象徴的に描かれている。そして、一条北の方の好色による、経済破綻の〈家〉の崩壊も「殿に残りたる物なし」かの俊蔭のぬしの奉り給へりける琴のみなむ、残りたりける。それをぞ、この時の大将に、万石に売りて、使ひける」(忠こそ、一三三)のように、〈琴の喪失〉を通し

て描かれる。このように、千蔭への遺言として、忠こそ
の実母の「腹汚き人」に対する警告から始まる「忠こそ」
巻を、〈琴の喪失〉で幕を下ろすことには、「石帯」と同
様に、俊蔭一族の琴の物語と接していこうする物語の長
編性の意図を読み取ることができる。

「忠こそ」巻以後、忠こそその流離は「吹上・上」巻に
おいて、行幸中の帝一行に見出されることによって終わ
りを告げ、阿闍梨になった忠こそが、「顔は墨よりも黒
く、足・手は針よりも細くて、継ぎの布のわけたる、鶴
脛」(吹上・下、二九五)⁽¹⁹⁾の落ちぶれた継母に出逢う場面
には、次のような千蔭父子を離れ離れにさせた一条北の
方の計略と懺悔が語られている。

『千蔭父子ヲ滅ぼさむ』と思ふ心深くて、親の
家の宝を取り隠して、『かれが盗みたる』と言ひ、
親のために咎あるべきことを、この人に言ひ負はせ
つつ、つひになむ失ひてし報いにや侍らむ、生きな
がら、かかる身をなむ受けて侍る」

(吹上・下、二九五～二九六)

そして、忠こそが乞食に零落した継母を「世に経給はむ
限りは、勞り奉らむ。後の屍をも納め、地獄の苦しびを
も救ひ申さむ」(吹上・下、二九六)と、救い養うことで、
継子譚は一応の結着がつく。この一条北の方の零落は、

当時の、〈好色な女〉にまつわる女性観の反映として描
かれたのかもしれない。しかし、一条北の方に対する千
蔭の「情け」の失敗とともに、忠こそその「こともなき色
好み」という〈性〉をめぐる言説に示された継母の計略
による忠こそその出家、そして、それが引き起こした千蔭
の死や〈家〉の崩壊という継子いじめ譚の結末は、男た
ちの色好みの否定的な側面をも物語っている。

おわりに

『宇津保物語』の「忠こそ」巻における一条北の方の
物語が、『伊勢物語』のつくも髮章段をどのように継承
し、さらに『源氏物語』がそれらをどのように受容して
物語を構築していったのかという〈好色な女〉の類型の
流れのなかで、〈行動する女〉としての一条北の方の物
語は、素材や表現の類似性を通してパロディ的な性格が
顕著である。

しかし、この物語の独自の〈老女の恋〉の物語の展開
において、一条北の方の恋の失敗によって生成されたよ
うに見える継子いじめ譚には、千蔭の「情け」ある行動
の失敗が潜在している。いわば、千蔭家の崩壊の原因は、
表現的には一条北の方の計略によるものであるが、その
経緯には、忠こそその母の遺言の破棄や、大事な石帯を一

条院に放置した行動があり、そして、忠こそその出家の契機も忠こそに対する疑念や冷淡な態度にある。

要するに、継母の計略があっても、父の千蔭が妻の遺言を守っていたら、家の崩壊までは至らなかつたはずであつたことを、この物語は冷ややかな目で語っているのである。

ところで、継母の計略には、この物語独自の〈性〉をめぐる言説が示されている。それは、それまでの女の好色だけを否定的に捉えた視点とは異なって、千蔭〈家〉の崩壊という悲劇的な結末を、千蔭の「情け」ある行動や、一条北の方によって捏造された忠こそその好色という〈性〉をめぐる讒言を通して、男たちの好色好みをもネガティブな形でとらえた言説である。

つまり、物語の表層の構造から内的構造に切り込んでみた「忠こそ」巻における一条北の方の恋の物語は、男たちの〈好色好み〉の美質を、女の立場から隠蔽されていた、その否定的な要素を暴き立てている。そして、一条北の方の恋の物語の展開において、継子いじめ譚、不孝、石帯を素材にした〈家〉の相伝問題など、短編的な挿話といえる一連の小さな出来事は、物語の全体の構造への取り込みと転移を通して長編化していくのであつた。

(注)

(1) 〈琴の物語〉では、琴の材料である神聖な木を伐る作業に、また、仲忠の予言や俊蔭一族の蔵を守り続ける翁・嬸が登場し、〈あて宮求婚譚〉では、三奇人の高基や真菅、そして、乳母の長門という滑稽な翁・嬸が登場する〔拙稿「宇津保物語」の老いたる人—〈琴の物語〉における翁・嬸の像を中心に—〕〔名古屋大学 国語国文学 91(二〇〇二年二月) 参照〕

(2) いろいろのみにについては、高橋亨「好色好みの文学と王権」(一九八〇年、新典社)、藤井貞和「物語における男と女—好色好み小考—」〔解釈と鑑賞—一九七七年一月〕、鈴木日出男「いろいろのみ業平から光源氏へ」〔国文学—一九八三年七月〕、今関敏子「〈好色好み〉の系譜—女たちのゆくえ—」(一九九六年、世界思想社) などの論がある。

(3) 服藤早苗『平安朝に老いを学ぶ』二〇〇一年、朝日新聞社。

(4) 注(2)の今関敏子氏の論文。

(5) 帯の騒動を起こした源典侍の好色を(紅葉賀巻)、源氏と頭中将が「笑ひ」ものとして想起するとき、「祖母殿」と呼んでいる(葵巻)。

(6) 大井田晴彦「一条北の方の造型—『うつほ物語』作中人物覚書」〔物語研究会会報(第26号)一九九五年八月〕。

(7) 小林茂美「源典侍物語の伝承構造論」(『源氏物語論序説』)

所収一九八七年、桜楓社、三谷邦明「源典侍物語の構造―織物性^{オリモノ}あるいは藤壺事件と臘月夜事件―」(『物語文学の方法Ⅱ』)所収、一九八九年、有精堂) 参照。

(8) 鈴木日出男「宮廷歌謡の形成」(『古代和歌史論』一九九〇年、東京大学出版社) 参照。

(9) 『冷泉家流伊勢物語抄』には「…九十九といふ年より変化初むる也。仍百年に一とせたらぬつともがみといふ。

女九十九にはあらねども夜ありきて業平をのぞきてわびしく心くるしき喪^{ウツ}をつくる故に付喪神といふなり」と指摘している(片桐洋一『伊勢物語の研究(資料編)』一九六九年、明治書院)。奥村英司「老女と色好み」は、「つくも髪^{カミ}の物語とは、色好みの男と巫女的な老女、という古代的な恋愛に形態に則ったもの」として捉え、「女の「見る」という行為の呪性」を指摘している(鶴見大学紀要(第32号)一九九五年三月)。

(10) 男の継子いじめ譚の性的な要素については、高橋亨「継子譚の構造―実例『落窪物語』」(『国文学』一九九九年九月)。

(11) 『世俗諺文』(源為憲)は「五月生子」として、五月生まれの子を忌むという例を漢籍から引用し、大鏡にも夏山繁木について五月生まれを忌むことが言われている(高

橋亨「物語の発端の表現構造」『物語文芸の表現史』一九八八年、名古屋大学出版会)。さらに、「五月五日」は、懸想文に対する、忠こそ返事に屈辱を感じた北の方が復讐を企てる、継子いじめ譚の発端の時空として設定されていることに注目したい。

(12) 飯沼清子「源氏物語に描かれた『帯』の意味―宇津保物語との比較を通して―」(『日本文学論究』一九八六年三月)。

(13) 小嶋菜温子「光源氏の〈犯し〉をめぐって―源典侍挿話と「をこ」」(『日本文学』一九八八年二月)。

(14) 「忠こそ」を長編との関係で位置づけようとする論文としては、笹淵友一「宇津保の創作意識」(『日本文学大系(月報49)』一九六一年五月)、室伏信助「うつほ物語の構造―忠こそ物語の位置づけ」(『王朝物語史の研究』)所収、一九九五年、角川書店)、三上満「忠こそ物語の意義について―忠こそ巻を中心に―」(『日本文学』一九八五年九月)、大井田晴彦「忠こそ物語の位相―『うつほ物語』の論理」(『国語と国文学』一九九五年一〇月)がある。

(15) 注(14)の三上満氏・大井田晴彦氏の論文、高野英夫「うつほ物語蔵開の巻試験」(『中古文学論攷(第15号)』一九九四年二月)に指摘がある。

(16) 注(2)の高橋亨氏の論文。この物語の「色好み」の対

人物名を補った。

(りゅう・じょんそん/名古屋大学院博士課程修了)

立と分裂の構造は、俊蔭に「淫欲の罪」が付けされたこと、父兼雅の「色好み」とは反対に、仲忠は「まめ」な男として造型されたこと、そして「いみじき色好み」である兼雅が俊蔭女のゆえに「聖にな」ることや「蔵開・上」巻で、「まめ」な男として語られてきた仲忠の、好色さが暴露されることから読みとることができる。

(17) 室城秀之「拒否される求婚者たち―行止・仲頼・忠こそ・藤英をめぐって―」(『うつほ物語の表現と論理』所収、一九九六年、若草書房) 参照。

(18) 注(2)の高橋亨氏の論文。

(19) 空海の『三教指帰』にも、「面は瓦の塙かと疑ふ。容色のかほばせ憔悴とかしげ、體形の姿・爾といやし。長き脚、骨堅つて池邊の鷺の若く、縮まれる頸、筋連なつて泥中の亀に似たり…」のような誇張された描写が見られる。これについては、高橋亨「男性作品から女の文学へ」(『物語文芸の表現史』一九八八年、名古屋大学出版会)

参照。

* 『枕草子』『伊勢物語』『源氏物語』の本文引用は、『新編日本古典文学全集』(小学館)により、頁数を示した。また、『宇津保物語』の本文引用および頁数は、室城秀之校注『うつほ物語 全』(一九九六年、おうふう)による。なお一部括弧内に